慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	現代中国における宗教の「翻訳」と「分配」：広東省梅州市香花派の事例として
Sub Title	
Author	ケイ, 光大(Kei, Kōdai)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2020
Jtitle	慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学心理学教育学： 人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.90 (2021.) ,p.79- 81
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	2019年度博士課程研究支援プログラム研究成果報告
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00069 57X-00000090-0079

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

2019年度
博士課程研究支援プログラム
研究成果報告

現代中国における宗教の「翻訳」と「分配」
―広東省梅州市香花派の事例として―

ケイ光大

筆者は助成期間に，「世界客都」（世界における客家の中心）[1]と呼ばれる中国広東省梅州市において，地元の仏教団体「香花派」の僧侶と一部の関係者を対象にして参与観察と聞き取り調査を行い，元々政府と主流の仏教界によって迷信と見なされた「香花派」が合法的「仏教」に組み入れられるプロセスを明らかにすることを通じて，1990年代から現代までの中国式社会主義という近代的イデオロギーと宗教との関係を究明することを試みた。研究成果は以下のとおりである。

梅州における香花派発展の経緯

香花派は，中国南部における葬式儀礼を専門とする仏教系の教団である。その歴史は明末まで遡ることができるが，具体的伝承に関する記録が欠けるため，未だに不明瞭な部分が多い。香花の職能者たちは，一般的に禅宗の祖師「何南鳳」[2]を香花派の創立者，もしくは集大成者として扱う。香花派の職能者たちは，結婚や葷酒食（肉や刺激性の強い野菜や酒）などに対する禁制がなく，さらに独自の葬式儀礼と独自の経文『香花経』をもつので，主流としての「叢林仏教」[3]から外れ，また国家政策に規定された仏教のイメージに合わないために，長い間香花派は仏教界や政府によって偽仏教と見做され，弾圧された。とりわけ90年代，梅州正統の法脈をもつ叢林に属する「千仏塔寺」が建設されて以来，香花派に対する差別意識がさらに顕在化してきた。

だが，2005年以降，その状況は静かに変化した。公務員であり地方知識人でもある人物が趣味で香花派に関する初めての専門書を出版した。彼の呼びかけのもとに，地方政府，仏教界と学術界は「香花文化」を梅州客家の独自な仏教文化として位置付けるようになったため，香花文化の再構築が始められた。2008年，芸術専門の学者や政府や一部の香花派の僧侶が，香花葬儀の中から芸術的な部分を抽出しながら文化財に登録した。また，地方知識人と大学教員によって構成された学術界において，香花に関する研究も徐々に増加していく。その他，地元民が親近感を持つ民間信仰の神々を操り，地元の客家方言を使い，韻律のある客家山歌の形で遺族たちを慰める香花葬儀は，農村部に限らず，都市部においても大きな市場を持つようになったが，それに対し，自らを正統的法脈と標榜する「叢林仏教」の影響力はかなり限定的となった。とはいえ，香花派の民間社会における影響力は徐々に拡大したものの，香花派の政策的性質は依然として迷信と宗教の間を行ったり来たりしている。主流の叢林仏教界，地方政府と香花派の間には，微妙な張力が維持されている。やがて，2012年，香花派は質的変化を迎えた。香花の文化的価値を意識した地方政府と仏教協会は，香花僧を対象とした学習会を開催し，そこでは政府職員，香花と叢林の権威者が教師を務めて，中国の宗教政策，およびいわゆる正統の仏教知識を香花

僧たちに教えた。これらの「合法化の儀礼」によって香花は正式に仏教界に組み入れられ，「地方仏教」の名目で合法化されてきた。

以上の背景を踏まえ，本研究の焦点は中国式社会主義による「宗教」枠の柔軟性，または現代中国社会における世俗と宗教領域の再配置・構造関係にある。それに対し，筆者は「翻訳」と「分配」という二つのキーワードを設定し，以上の問題を理論化することを試みた。

翻訳（translation）

「翻訳」とは，宗教の実践や教義を中国の社会主義の理論群に合致するように，両者を繋ぐ新しいメカニズムを創造することをさす。本研究では，元々排除すべき迷信と政府に扱われた香花派が，最終的に国家の理論群に合致するような形で合法的「仏教」枠に組み入れられ，それに伴い宗教化してきたことを描写し，翻訳のあり方を提示した。筆者の分析によると，香花派が最終的に国家に認められた理由は少なくとも二つがあると考えられる。

その一，2000年代以降，香花派の社会的影響力（文化財の登録，芸術的価値，学術界の関心，宗教市場の占有率など）は徐々に増加していく一方，香花派の持つ迷信というマイナス的な側面も保持されていた。香花派の影響力の拡大に伴い，香花と叢林の間に行われた「正信」（仏教としての正統性）をめぐる論争，または仏教界が主導した香花派を対象とする戒律改良運動などが徐々に水面上に浮上した。政府にとって，香花を如何にして位置づけられるのかという問題は，すでに看過してはいけない状況になった。それに対し，梅州市政府は，香花派を地域社会の安定かつ経済発展にとって有用なものとして認定したため，仏教界との合意によって，香花を合法的「仏教」に組み入れた。

その二，香花派の宗教観念は，21世紀以来の儒教思想の再評価に伴い再創生された中国的モラルに共通点がある。例えば，「香花」葬儀を行った時，僧侶たちが歌った祝詞の内容の多くは「孝」という道徳観をモチーフとした民間故事である。また，僧侶たちは，儀礼での神像や神画などの空間配置，および儀礼の作法に対して解釈する時，常に日常生活のマナーと対照しながら，神々の道徳と人間同士の「礼」は同じであることを筆者に説明した。つまり，香花派の宗教観念は儒教思想と同じく「孝」と「礼」を重視するため，儒教思想の合法化に伴い，香花派の観念も社会主義のイデオロギーによって要求されるモラルに合致するようになった。それ以外，一部の香花派僧侶は，香花の宗教観と政治的スローガンや国家政策の内容との一致性を強調した。ある僧侶が，香花派の「三教合一」の観念[4]と国家が提唱する「民族団結」は同じく「団結」と「平和」を重視するから，香花派こそが，社会主義国家に貢献できると判断した。自らの教義を国家のイデオロギーに翻訳する力学は，政策変化を鋭敏に対応するための香花派の策略とも言える。

分配（distribution）

社会に貢献するため，宗教以外の名目で観光資源，芸術，民俗文化などの世俗領域に宗教が参加することを世俗への「分配」と称する。

改革開放以降，中国政府は「宗教は民衆のアヘン」という観念を諦め，宗教を中国式社会主義社会の建設に動員しようとする対象として扱った。従って，公認された宗教は，慈善事業や宗教芸術や観光資源などの宗教以外の名目で，多くの世俗的領域に参加する機会が得られ，地方政府と宗教との関係は協力，相互利用などの多様な側面が見られるようになった。このような背景から，香花派が最終的に宗教

として国家に認められた一つの重要な理由は，香花派は世俗領域に「分配」できることによる。香花派の宗教儀礼は，客家山歌と伝統芸能など地域性の強い要素をもつため，地方政府に「梅州客家の芸術」として扱われ，文化財の登録や伝統芸能の演出などを通じて，政府の業績に貢献し，観光客を呼び込むことができる。それ以外に，一部の地方知識人と学者は，香花派の宗教儀礼や観念には，学術的な価値が埋め込まれていると認識するようになり，香花派に関する専門の研究機関を創立した。従って，芸術の場，文化財の場，学術の場に分配された香花派は，世俗的価値を持つものと地方政府に判断され，最終的に仏教の枠に組み入れられた。元々世俗領域に向けた分配は最終的に宗教領域に戻った。

一方，香花職能者たちは，世俗領域への分配によって獲得された合法性を，宗教としての正統性に置き換え，彼ら／彼女らが香花の合法性を使い，叢林からの非難に抵抗しながら，自らの仏教としての正統性を守ることが観察された。つまり，世俗領域への分配によって獲得された「正当性」は元の文脈から脱却し，世俗と宗教領域の間を横断しながら，香花派の僧侶たちに戦略的に利用される。つまり，元々世俗へ貢献するための分配は，再帰的に「宗教」の正当性を強化するようになった。

宗教–世俗ハイブリッド

「翻訳」と「分配」の視座は，組織論（宗教組織と国家機構との関係）と観念論（宗教の教義と国家イデオロギーの理論群との関係）を連動させながら，宗教と近代イデオロギーの関係を全体的に把握する優位性があると考えられる。香花派の事例から分かるのは，中国式社会主義体制のもとに，政府が何を宗教とみなすかについては融通性があり，迷信と宗教の境界線が具体的なコンテクストにより調整できることである。また，施政者や学者らが香花派を積極的に動員し，世俗領域へ貢献させようとした結果，香花派が仏教に組み入れられたという。一方，香花職能者たちは，世俗や宗教を区別せず，多くの領域との繋がりを通じて，自らの存在が地域社会にとって不可欠なものとなるようになった。いずれにしても，世俗化現象のような，宗教と世俗をはっきり分断される現象が観測されず，むしろある種の「宗教–世俗ハイブリッド」が現れたと考えられる。

注

1　客家とは，漢民族の中の一つのエスニック集団である。近年，梅州市を含める各地の政府と企業は客家文化を商品や観光資源として利用し，様々な客家文化表象を創造した。

2　何南鳳とは，梅州市興寧出身の臨済宗の僧侶である。一般の禅宗僧侶と異なり，世俗生活と出家生活を往復する何南鳳は「半僧先生」と自称した。戒律を守らないと仏教界に非難される「香花派」の職能者たちは，自らの戒律は邪道ではなく，何南鳳の教えによるものと反論した。

3　梅州において，「叢林仏教」という用語は常に香花派の対義語として僧侶たちに使われる一方，人によって叢林の定義も一致しない状況が多い。ある香花僧の言うには，「そもそも90年代以前，梅州の寺廟はすべて香花に属し，叢林と香花という区分がなかった」。要するに，梅州でいう「叢林」という言い方は，叢林仏教が香花を「正統的」仏教から排除するための語法である。

4　叢林仏教と違い，香花派思想の中核は，儒・釈（仏）・道を融合すること，いわゆる「三教合一」である。